夏色の空模様

尾ノ坂　駿介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夏色の空模様

【Ｎコード】
Ｎ７１３２Ｈ

【作者名】
尾ノ坂　駿介

【あらすじ】
一年間募らせた、一途な恋。あの一言から、私は彼を好きになった……。

（前書き）

短編集です。

「相川翔太。私と付き合え」

青空が一面に広がる昼下がり。からりとした日差しのよい太陽の光が窓から差し込む。

季節は既に真夏を迎え、窓の近くにある木陰ではセミたちが最期の勇姿を見せようと言わんばかりに鳴き続け、自らの生命を常時燃やしている姿が良く見えている。

そんな中、腕を組んで彼を見下ろしていた彼女――最上楓の顔を見て、相川翔太は弁当のコロッケを口に含みつつ、同時にそれを吹き出しそうになった。

阿修羅の仁王立ちのように構えて彼を見下ろす彼女は、何やら喧嘩腰の様子にも見えてしまう。

そして、彼に向けられるまっすぐな視線。まっすぐな眼差し。その彼女から伝わってくる真摯な思いを嘘と感じるのは、甚だお門違いと言ったところだ。

クラスの視線が二人に集中する。学校の昼休みに、こんな人目も立つ場所で堂々と告白する彼女に半ば驚いている様子だった。

そして、翔太は彼女の言葉を理解する。

「……あぁ、購買のパンを買うのに付き合えってか。分かった。一緒に行こう」

「誤魔化すな」

「胡麻貸すな？　別に貸したつもりはないぞ」

「……ふざけているのか？」

楓の口調が、次第に苛立ちのものへと変わっていく。
その反面、翔太はいまだ彼女の言葉を理解できていないのか、「空が綺麗だなぁ……」と机に肘を当て、うつつを抜かしながら呟いている。
彼がその発言を理解出来ないのも無理はない。
突然のクラスメイトの女子からの告白は、彼にとってS極とN極で引っ付くであろう磁石が、SとS、もしくはNとNで引っ付くという、言わば電磁気学の基礎を表したマクスウェル－ヘルツの方程式を矛盾させるほど、その驚きは計り知れないものであったからだ。

「私が言っているのは……その、つ、付き合うというのは恋人同士の付き合いだということで……ああ！　じれったい！　とりあえず屋上に行くぞ相川！」

じれったいのはお前だ、と翔太が突っ込みを入れる前に、楓は彼の腕を取ってずるずると教室から引きずり出す。
少しだけ彼女の顔が朱の色に染まっていたのも、翔太は見逃さなかった。

◇

「さて、先ほどの話だが……。どうなのだ？」

「いや、どうなのだって言われても……」

屋上の中心で向かい合う二人。
この夏には似合わないひやりとした風が、今の二人の異様な雰囲気を和やかにさせようと吹き抜ける。
風によって彼女のショートボブに切り分けた髪が音も無く揺れて

靡く。
今の季節から、彼女には麦わら帽子が似合いそうだと、翔太はこのような状況に立たされてもそんなことを考えてしまう図太い男でもあった。
屋上は本来使用が禁止されているために、今は翔太と楓以外に誰もいない。時々清掃に来る用務員の先生くらいしか此処へは足を運ぶことはなく、以前は生徒の立ち入りも許可されていたが、鉄柵の破損が多々見られる事から危険と告げられ、屋上は生徒立ち入り禁止区域となった。
彼女のように合鍵を持っていれば話は別なのだが。

「俺、まだ最上のこと知らないし……」

翔太は楓のことをあまり知らない。
口調も性格も態度も厳格な雰囲気を漂わせる彼女に、翔太は自分から話そうとはしない。
それ以前に面識も無いはずの彼女からいきなり告白されることが、既に彼にとって論を外している。

「相川は嫌なのか……？」

きゅ、っとスカートの裾を握って、楓が物悲しそうに呟く。その仕草に彼はドキリと胸を高鳴らせた。

実際、そう言われてしまうと困るのが翔太だ。
楓は学年一とは言わないが、クラスでも上位を争うほどの美少女でもある。スポーツ万能で成績優秀、極めつけは莫大な権力と資産を持つ財閥の令嬢。
何一つ欠けている箇所が見つからない彼女は完璧と言っても間違いではない。

同じクラスメイトとして翔太が密かに憧れを抱いていた途端に、これだ。
夢か妄想か幻覚の類では、と彼自身が疑ってしまうほど、この事実は衝撃的なものであった。そんな好条件を呑まないのも男として廃ってしまう……と一般常識的に考えるのが普通だが、いかんせん彼は用心深かった。

「嫌とかじゃなくてさ。なんていうか、順序というものがあってな」

「――む、やはり教室ではなく屋上やユグドラシルの木の下での告白がよかったのか？　それはすまない。思慮に欠けていた」

「何処にあるんだよ。ユグドラシルの木って」

ボケなのか本気なのか分からない楓の一言に翔太が突っ込む。

「知らないのか？　ユグドラシルと言うのは北欧神話で語られる世界樹だ。根はニーズヘッグと言う蛇にかじられ、葉はヤギのヘイズルーンに食べられて、根下はアースガルズ、ミッドガルズ、ヘルに通じてあってさらに」

「分かった分かった。とりあえず本題に戻ろう」

神話については全く無知である翔太の一言が彼女の力説を遮る。自分の得意とする知識を語りたかったのか、楓は少し機嫌を損ねた様子だった。

「……それに、俺らってそんな親しい間柄でもないし、会話だってほぼ皆無だろ？　普通は俺のことも知らないはずで……」

「し、知らないはずがないだろう！」

「――え？」

楓がやけに強めに言い返すと同時に、自分の言葉が失言だったことに彼女は直ぐに理解する事になる。

さっきはまだほんのりと染めているだけだった頬が、今度は真っ赤な色に変わっていった。

「知らないはずが……ないだろう」

彼女は再び顔を下に俯かせると、蚊の鳴くようなか細い声で、ぽつりと独り言のように言う。

それはいつもクラスで揚々に振舞っている彼女とは到底思えない、弱弱しい姿だった。

「相川は……ううん、翔太は覚えてないの……？」

突然の彼女の変化に、翔太はたじろいだ。

潤んだ瞳に今にも泣き出しそうな表情。じっと見据えているその瞳の先には、驚きで顔を引きつらせている彼の姿が映っている。

翔太はいまだ楓の言う意味が理解出来ていなかった。

覚えていない。そうはっきり告げてしまえば事は直ぐに済むのだが、実際の彼の心境はそれほど冷静に、非道に言えるほど穏やかではない。

戸惑いがちな翔太を前に、楓はおどけたような表情で控えめに笑った。

「いや、すまない。覚えていないのも当たり前なのかもしれないな。

あれは入学して最初の頃だったし、もう一年も前の話になる。……翔太、一年の時、私とクラスが一緒だったのは覚えているか？」

「最上と？　……あっ」

一年の時のクラスの様子を思い浮かべ、翔太が声を上げた。

確かに、翔太と楓は同じクラスで一年間を一緒に過ごしている。窓際の席でいつも一人で席に座っている彼女を、翔太は良く見かけていた。

「あの頃は、誰も私を『良いとこの令嬢』とばかり見て敬遠し、友達らしい友達もいなかった。だから私も意地になって、自分から友達を作ろうとはしなかった。……でも、初めて出会った時の、翔太のあの一言で私は救われたんだ。深い奈落の奥底に沈めていた気持ちを、再び面にさらけ出すことが出来たんだ」

楓は、くるりと翔太に背を向けると、屋上の手摺りに腕をかけて、遠くに見える街並みを見下ろした。

クラクションを鳴らしながら通り過ぎていく車と車。賑やかな人通りを見せる商店街。そして、雲一つない晴天が広がるこの大空は、真っ白なキャンバスに水色を水彩したような透明なものに満ちていた。

「――見つめていると、吸い込まれそうなくらい綺麗な空だな。翔太も、そう思わないか？」

彼女が街並みを見ることを止めて、この大空を見つめだしたことで――ようやく、翔太は彼女の言っている意味を理解した。

彼があの時言った言葉を、楓は今もちゃんと覚えていたのだ。

彼女にとって、その言葉はどれほど大切だったか、どれほど重要

だったのか――おそらく当人以外には分からない事なのだろう。

やがて、翔太はぽつりとあの時の言葉を言い放った。

一つ一つを噛み締めるように、あの時彼女に言った言葉通りに。

「……“笑顔を絶やさないで、前を向いて、この空を眺めてみろ。大きな空を見ていれば、自分の考えていた悩みだって、直ぐにちっぽけだったなって思えるからさ”」

「……うん」

翔太は、楓と話したことが無いわけではなかった。

楓がいつも一人でいた時、いつも遠くを見つめていた時、翔太は彼女に向けて一度だけそう言っていた。

それは同情でもなく、哀れみを込めた言葉でもない。

ただ、時折見せる楓の寂しげな表情が、翔太にはどうしても辛く見えて仕方が無かったから。

わざと回りくどい促すような事を言って、彼女自身の本当の気持ちを気付かせようとしていたのだった。

心ここにあらず。それがあの時の楓の様子だった。

「一人でずっと苦しくて、辛くて、泣きそうになった時、挫けそうになった時、翔太のその言葉からいつも勇気を貰っていた。実を言えば……最初はその意味がわからなかった。けど、家に帰って、何度も何度もその意味を考えていたら、考えていたら……涙が、溢れてきた。あれは私を慰めてくれていた言葉なんだって。何気ないようで深いその一言は、いつも一人で過ごしていた私への『メッセージ』なんだって。それが私は……本当に嬉しかったんだ」

静かに吹き抜ける風が再び、ふわりと楓の髪を靡かせる。それを左手で押さえるように整え、彼女はもう一度翔太と向き合った。
真剣な眼差しは、あの頃から色褪せてはいない。
翔太もそれから背けないように、じっと彼女を見つめた。

「あの日から……私は翔太の事を好きになった。異性を好きになったのは初めてだから、最初はどうして良いか分からなくて戸惑ったけど……それでも、この気持ちは大切な『自分の素直な想い』だって、今なら胸を張って言える。今なら……お前にこの想いをぶつけることが出来るんだ……だから……」

そこまで言って彼女は口を噤ませたが、込み上げている思いを無駄にすること無く、翔太に向けて告げた。

「だから……私はお前が、相川翔太が好きなんだ……どうしようもなく……好きなんだ……！」

精一杯の勇気。精一杯の本物の気持ち。
それを翔太に伝え、楓は下唇を噛み締めて、嗚咽を漏らしながら泣き出した。
断られる事の怖さか、それとも、これ以上この空気に耐えられなくなったのか、もしくは両方か。
告白するのは誰だって勇気がいる。それをするかしないかは個人の自由だとしても。
それでも彼女は実行した。胸が張り裂けそうになる思いを秘めたまま、翔太に告白した。結果がどうなるにしろ楓は、この一年間募らせてきた想いを無駄にはしなかった。
ただ遠くから好きな人を見つめて終わる結末にはしたくなかったから。
ただ遠くから見つめて、好きな人を誰かに取られてしまうような

結末にはしたくなかったから。
――やれやれ、俺の心配も杞憂に終わったな。
と、翔太は彼女の隣までゆっくり歩み寄ると、同じように屋上の手摺りに腕をかけて独り言を呟いた。
「思えば……俺が友達になってやればよかったんだよな」
「……え？」
泣き腫らした顔を上げて、翔太の顔を見る。ハンカチを持っていれば直ぐに貸していただろう。
それほど彼女は頬に涙の後がくっきりと残る、くしゃくしゃの酷い顔だった。
翔太は後悔していた。
彼自身も楓を敬遠していた事を。
話しかけたくても話しかけられない。そんな葛藤が生まれては、いつもそれが出来ずに日々を迎えていた。
本来なら、勇気がいるのは翔太の筈だった。友達になりたい、仲良くなりたいと思っていたのに、彼は今の今まで話しかけようとはしなかった。
それが彼女にとってどれだけ寂しい思いをさせてしまったのか……考えるだけで、翔太は胸が締め付けられる思いでいっぱいになる。
あの時は結局、ただ一言伝えたい事を伝えて終わっていたのだ。
本当は、もっと喋りたかった。喋って、それから一緒にクラスに馴染んでいけれたら良い。そう思っていた。
――その筈なのに。
未だ呼吸の整わない楓に、翔太は彼女の肩を優しく叩き、諭すように言った。

「ありがとうな、楓」

翔太もまた、楓から勇気を貰っていた。

彼女の告白を受けて、彼自身も自分に足りないものを見つけることが出来た。

何事も恐れずに進もうとする勇気。それが翔太には欠けていたのだ。

彼女は強い。本当に強くて、とても優しかった。

ぐずぐずと鼻を啜る彼女を見て、翔太は無言で彼女の髪を撫でた。サラサラとした髪は彼の手を逃げるように去っていく。手探りで掴もうとしても、するりと指の間に通っていく彼女の髪に、翔太は愛しささえも感じていた。

彼女の泣き顔は、翔太に髪を撫でられたのが原因か、再び真っ赤に変わっていた。

「……もう泣くなよ。俺はお前を拒んだりしないからさ。言いたい事は、ちゃんと伝わったよ」

「え、じゃ、じゃあ恋人――」

「それはまだ。ほら、俺たちお互いの事、全然知らないだろ？　だから……とりあえず、友達から始めないか？」

「と、友達か……同棲して、おはようのキスからおやすみまでのキスも友達の範疇なのか？翔太はＯＫなのか？」

「そりゃ友達じゃねーだろ。却下だ」

「ぬっ……」

友達と恋人の違いが未だ理解出来ていないのか、楓は理解できなさそうに腕を組んで首をかしげた。

だが次の瞬間には眩しく光る白い歯を見せて、笑顔で彼に向けて言い放つ。

その目に、迷いはなかった。目標を見つけることも出来ず彷徨っていたあの時とは違う、光に満ちた瞳だった。

「よし、では翔太、約束だ！　私と付き合うまでは他の女子と付き合うのは許さん！　絶対だ！　絶対に許さないからな！」

「さあ……それは、どうだろうな」

「なっ――！」

楽しげな笑い声と文句を言うような声は、いつまでも屋上から聞こえている。

そして雑談染みた口論の後、二人はお互いの顔を見て、一緒に空を見上げた。

相変わらず青空は、どこまでも晴天が続いていた。

あの頃の憂鬱な景色とはまったく違う、美しい世界が広がっていた。

Ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7132h/

夏色の空模様

2011年1月5日14時17分発行